

幕末維新史研究における越前藩史書の重要性について―薩摩藩研究を事例として

町田 明 広

はじめに

筆者の研究対象は幕末政治史、特に薩摩藩の文久期以降の動向であり、現在は主として慶応期を中心に研究を進めている。薩摩藩研究に必須な史料として、『鹿児島県史』(忠義公・玉里島津家等)が挙げられるが、当然のことながらこれだけではない。その他、例を挙げれば『孝明天皇紀』『防長回天史』『改訂肥後藩国事史料』等であり、また『朝彦親王日記』『中山忠能履歴資料』『伊達宗城在京日記』といった日本史籍協会叢書にも、目を通さなければならぬ。しかし、その他史料で最も重要なものが越前藩関係史料であることには、異論がないであろう。

幕末政治史における越前藩の重要性は、薩摩・長州両藩に匹敵するものであり、その事由は以下の諸点に集約される。幕府の要職を務め、国政に容喙し続けた松平春嶽および有能なブレインが存在したこと、安政期から慶応期まで、幕末期全般にわたって政治的事象の多くに関わり、時にキャスティングボートを握ったこと、家門筆頭でありながら、幕府の私政を厳しく正そうとする政治姿勢を示し続けたこと、反幕府的な薩摩藩や外様雄藩(宇和島・土佐藩等)とも盟友関係にあったこと等である。薩摩藩研究を深化するためにも、越前藩の研究は必須である。

幕末史における越前藩と薩摩藩

越前藩と薩摩藩の関係は極めて濃密であり、幕末政治史を語る上で薩長に匹敵するほど、重要な政治ラインを形成していた。ここで両藩の関わりについて、概観しておこう。幕末の政治的沸騰はペリー来航(一八五三)から始まるが、老中阿部正弘の安政の改革を支持し、將軍継嗣問題

では一橋慶喜を推す一橋派を阿部・島津斉彬らと構成したのが春嶽であった。斉彬が江戸に不在の時は春嶽がリーダーとして活躍し、橋本左内を抜擢して西郷吉之助とともに朝廷工作を実行させた。しかし、安政五年（一八五八）には大老井伊直弼の登場によって、宿願は水泡に帰し、安政の大獄で春嶽は急度慎を余儀なくされ、左内を失う大きなダメージを被った。

その春嶽を復権させたのは、斉彬亡き後に薩摩藩の実権を掌握した島津久光である。文久二年（一八六二）、率兵上京した久光は朝廷権威をバックにして幕府に人事改革を迫り、慶喜を将軍後見職、春嶽を政事総裁職に就かせることに成功した。春嶽は文久の改革を推進し、参勤交代の緩和の実現等に尽力したが、国内における対外政策は「未来攘夷」（通商条約を容認、将来武備充実に繋ぎ合わせる）、「即時攘夷」（通商条約を容認、外国船砲撃などの攘夷を即時に実行）⁽¹⁾に割れて激しい抗争を繰り広げたため、文久三年（一八六三）、将軍家茂と同時期に上洛した春嶽は政争に巻き込まれて挫折を味わい、就任したばかりの政事総裁職を辞して福井に引き籠った。

その後、春嶽は横井小楠をブレインに迎えて藩政改革を実施し、挙藩上京計画を画策したものの未遂に終わり、春嶽の政治生命も尽きたかに思えた時、またもその復権に貢献したのは薩摩藩であった。会津藩と共謀した八月十八日政変によって、薩摩藩は三条実美・長州藩といった即時攘夷派の排除に成功、久光が上京して朝政参与に向けた尽力を開始し、春嶽にも参画を求めた。元治元年（一八六四）、春嶽も加わる朝政参与（いわゆる参与会議）は実現したものの、慶喜と久光の対立から参身体制はあっけなく瓦解した。

同年七月に勃発した禁門の変では、官軍の主力として長州藩を撃退した薩摩藩は、長州征伐の総督に春嶽を期待したが、藩主松平茂昭が副総督に就いた。西郷が参謀格として総督徳川慶勝に従ったため、越前藩と薩摩藩との接触は頻繁であり、協力して即時解兵に向けて尽力し成功を収めた。しかし、幕府はこれを喜ばず長州再征に動き出したため、越前藩は幕府と距離を置きながら、薩摩藩と協力してその阻止を企図した。



写真1 『昨夢紀事』『続再夢紀事』『丁卯日記』『戊辰日記』

松平文庫 福井県立図書館保管

薩摩藩は長州征伐で極端に寛典志向を貫き、更に、慶応元年（一八六五）には長州再征・通商条約の勅許問題でも抗幕姿勢を鮮明にしたため、朝廷・幕府の双方から嫌疑を受けることになった。大久保一蔵が春嶽の上京を促すために福井に赴いたため、越前藩にも嫌疑がかかったが、一方で幕府は対決姿勢を強める薩摩藩の取り込みを企図し、その周旋を越前藩に依頼した。その活動の中心となったのが中根雪江であり、これ以降も春嶽の最側近として様々な周旋活動をするようになる。こうした越前藩と薩摩藩の蜜月時代は政治的な側面に止まらず、経済的にも藩際交易（諸藩間での貿易）で強固に結びついていた。

慶応二年（一八六六）、幕府は長州再征を強行したため、春嶽は將軍を諫争する目的で上坂、しかし、家茂が急逝する非常事態となり、そのまま止まって慶喜の將軍襲封に尽力した。翌三年（一八六七）、四侯会議に春嶽は久光とともに参加し、朝廷主導による兵庫開港と長州藩寛典処分（二八六七）の同時勅許を目指したが、慶喜の政治力の前に敗れた。この頃から武力発動による廢幕を企図する薩摩藩と、あくまでも將軍家を庇護しようとする越前藩の関係は円滑さを欠き始める。王政復古クーデターでは同一歩調をとったものの、慶喜の処遇を巡って春嶽は薩摩藩を代表する大久保西郷と激しく対立、春嶽優位に展開していたが、鳥羽伏見の戦いの勃発によってその目論見は水泡に帰した。

越前藩史書の概要とその意義

このように、幕末政治史の中心に越前藩は常に位置しており、薩摩藩との関係性でも全期間にわたって濃密さを継続するなど、その重要性は長州藩を凌駕するとしても過言ではない。つまり、幕末維新史研究において、特に薩摩藩研究では越前藩の動向は常に留意すべき対象であり、越前藩史書の重要性は再認識すべきである。その史書とは、『昨夢紀事』『再夢紀事』『続再夢紀事』『丁卯日記』『戊辰日記』である。『続再夢紀事』のみ村田氏寿らの明治中期以降の編纂によるが、そ

の他は中根雪江によるほぼ同時代の編纂史料である。

『昨夢紀事』は嘉永六年六月のペリー来航時の越前藩の対応から始まり、安政五年七月の安政の大獄で春嶽が隠居急度慎に処せられるまでの六年間を叙述する。將軍継嗣・条約勅許の両問題の経緯が詳細であり、安政期の超一級史料である。斉彬や西郷の動向も詳細かつ的確に捉えており、この期の薩摩藩研究にも必須である。『再夢紀事』は文久二年四月から八月までの四ヶ月間と扱う期間は短いものの、復権を遂げた春嶽が政事総裁職に就き、將軍後見職に就いた慶喜とともに文久の改革を推進する経緯を明らかにする。そもそも、本件は久光の率兵上京・勅使大原重徳の下向に端を發した一連の政治過程と連続しており、幕府側から見た薩摩藩・久光の動向が詳細に記され、史料価値が極めて高い。

『続再夢紀事』は文久二年八月から慶応三年（一八六七）十月までの幕末最激動期の必須史料であり、攘夷別勅使（攘夷実行を迫る臨時勅使）・將軍上洛・八月十八日政変・参与會議・禁門の変・長州征伐・条約勅許・長州再征・四侯會議等の主要な政治事象の深層を叙述しつつ、越前藩の対応や春嶽の言動が過不足なく網羅されている。この間の中央政局は、薩摩藩と長州藩ないし幕府との対決が中心となっており、盟友関係にあった越前藩の詳細な記録なくして、薩摩藩の政治動向の真の解明はできない。

『丁卯日記』は慶応三年十月以降、大政奉還前後の越前藩の動向および王政復古クーデターの真相、その後の慶喜の復権を図る十二月晦日までの春嶽の周旋動静を詳細に叙述する。『戊辰日記』は慶応四年（一八六八、明治元年に九月八日改元）正月から八月まで、鳥羽伏見の戦いで朝敵となった慶喜の寛典処分・徳川宗家救解に腐心する春嶽の動向を描き出す。この間の朝廷・旧幕府・薩摩藩の駆け引きが十分に活写されており、この時期の最も重要な史料であることは論を待たない。

これらの史書は、前述した越前藩の重要性に裏打ちされた貴重な文献であり、幕末期を全て網

羅し、朝廷・幕府・諸侯の動向を余すところなく叙述した唯一無比な史料群であることは自明であるが、加えて、本史料にしか掲出されていない内容が数多く含まれている点は特筆すべきであろう。薩摩藩研究において、『鹿児島県史料』が中心となることは間違いないが、薩摩藩関係者による編纂物であるため、自藩に不都合なことが割愛されている可能性は否定できず、また、十分な記述がない場合も散見される。よって、その他史料で補う必要が出てくるが、その場合、最も有効な史料こそ、これら越前藩史書であることは疑いない。

越前藩史書に見る薩摩藩の動向

それでは、越前藩史書を活用した薩摩藩研究の具体的な事例について、本稿では紙幅の関係から『続再夢紀事』第二に含まれる文久三年後半に期間を限定し、八月十八日政変・朝政参与を中心に述べたい。

八月十八日政変について、当初は実行を十六日と定めており、中川宮（朝彦親王）は鎮撫大將軍辞退の奏上を装い、当日の午前四時に参内したが、孝明天皇は「御目覚前故特に御目覚を願ひけれと兼て御痔痛在らせられ御用場にて殊の外時刻を移させられ」（二二五～二二六頁）⁽²⁾ たため、午前六時を経過してようやく拝謁が叶った。宮は親征問題等についての真の叡慮を伺い、宮および薩摩・会津両藩の提携による武力を背景にしたクーデターを進言したが、この日の同意はなかった。十六日の計画が未遂に終わった状況が確認でき、政変直前の緊迫したやり取りが確認できる唯一の史料である。

また、薩摩藩の政変後の政権構想について、十月十七日、久光が派遣した小松帯刀が上京途時の春嶽を大津で迎えた際に、言上した内容（一八一～一八二頁）によって確認したい。これによると、「朝廷ニ於て過般八月十八日の一變動後何とか今後の御政体を定めらるへしとの御事なれと、いまた王政に復せらるへしとも征夷府へ委任せらるへしとも御一定の御詮議にハ至らさるよ



写真2 中根雪江

福井市立郷土歴史博物館蔵

し、されハ今般御召喚ありし一橋公を初賢明諸侯方御会同の上ハ先第一ニ此事を御相談在らせらるゝなるへし」と、朝廷においては政変後、王政復古が大政委任かを決めかねており、まずは慶喜を始めとする有志諸侯が会同して議論すべきであると述べる。

そして、「斯而此事御相談の上旧の如く征夷府へ御委任に決せらるゝも、尚此上大樹公にも御上洛在らせられすてハ公武御合体ニ至り難かるへけれハ関東ニ於て是非共其御覚悟なかるへからす」と、朝議が大政委任に決しても、将軍家が上洛しなければ公武合体は実現不可能であるとして、幕府にもその覚悟が必要であると説く。しかし、「大樹公御上洛ありて公武御合体に至るも幕府の政権を依然小身の閣老に委ねられてハ天下の人心最早其制に服せざるへけれハ、更に大身の諸侯に政権を執らせらるゝの制を創定せられざるへからす」と、公武合体が実現しても、小身の閣老に委ねては人心の離散を招くので、大身の諸侯に幕政を執らせるべきであると、譜代門閥の否定、一門・外様大名の幕政参画を提唱した。

また、「朝廷にても威権ハ摂家方及び伝議両奏にのミ帰し居る事なるか是も皇族方に帰する事を希望す」と、朝廷が摂関家と議奏・武家伝奏によって牛耳られているとし、皇族による朝政主導を希望すると語っていることは重要である。薩摩藩の利益誘導者である中川宮は、自身が摂関家に代わって中央政局を執り、幕府の存在も認めながらも圧倒する皇威伸張を企図し、それを実現するための後ろ盾を求めた。一方、久光は幕政に譜代大名に代わって深く関与するための幕府の人事改革を勅諭によって実現しようとし、中央政局に強力なパートナーを欲した。ここに、天皇親裁を基軸として、中川宮と久光両者の思惑は合致していた。その事実を裏付けする小松の発言は極めて意義深く、この後、薩摩藩が画策した斉範親王の還俗・親王宣下も髣髴させる。こうした薩摩藩側の具体的な構想は、『続再夢紀事』にしか記載がなく極めて貴重である。

十月三日に上京した久光にとって、この時点での最初の課題は同盟諸侯の上京であった。特に最大の盟友とも言える春嶽の至急の上京は、久光のみならず、幕府においても求められた。しか



写真3 松平春嶽

福井市立郷土歴史博物館蔵

し、三月二十一日に政事総裁職の辞職勅許を得ずして退京したため、二十五日には罷免・逼塞に処せられていた。越前藩からの懇請もあり、松平容保および在京薩摩藩士は朝廷への周旋を開始していたが、久光の中川宮等への周旋も相俟って、十月六日には有免され、七日に上京が沙汰された（十三日福井発、十八日入京）。両藩の盟友関係の強さが窺えよう。

ところで、上京時の中央政局について、久光書簡（春嶽宛、十月八日、一七二～一七四頁）によると、「方今朝廷之御摸様細微伺得不申、乍併正議被為立兼候趣二被伺候」と混迷する朝廷に対する懸念を述べる。そして、「兎角方今之形勢公平正大之議論を以朝廷を不奉助候而は、迎も神州挽回公武御一和之道も有之間敷と愚考仕、未一句も献言不仕」と、春嶽との共同戦線による朝政改革の実行の意向を述べ、早期上京を繰り返し懇請した。加えて、慶喜、山内容堂、伊達宗城にも召命があつた旨を伝えるなど、久光は慶喜を中心とした諸侯連合による公武融和、朝政改革を企図しており、とりわけ春嶽に大きな期待を寄せた。

また、小松書簡（家老岡部豊後宛、十月七日、一七四～一七六頁）によると、「御京着後何事も不被仰立、兎角春岳公御出京之上二御賢考之程も被遊御承知、其上何事も被仰立候御趣意二而未何方へも御出無之被遊御待候事二御座候」と、春嶽の上京までは久光自身の表立った周旋は控える旨、伝えている。このように、薩摩藩の越前藩に対する依頼が深甚であることが確認できるが、久光および小松書簡は『鹿児島県史料』に掲載されておらず、『続再夢紀事』に依らなければならぬ。

薩摩藩・久光が朝政参与を実現していく経緯についても、『続再夢紀事』なくして解明は不可能である。十月十九日に至り、久光は初めて春嶽を東本願寺学林の旅宿に訪ね、今後の周旋方針を協議している（一八五～一八七頁）。久光は「皇国の国是を確定せらるへき一大好機なれハ、第一に一橋公次二春嶽君容堂君伊予君等御集會にて御熟議あり、扱其内朝廷より御下問あらせらるへけれハ、其御熟議ありし次第を以て御上答あらハ、国家の御為には此上なき事と存す」と、

国是確立の千載一遇のチャンスであり、慶喜を頂点とする自派諸侯による諸侯会議を開催し、そこに対する下問および朝議へ上申するシステムを構築し、朝政に参与することを提言した。

また、激論家は未だに無二念打払いが真の叡慮と主張しているが、諸侯会議で熟慮される対外政略を始め、外国の事情を「天前に於て御直に奏上し、又叡慮をも御直に伺はる、事とならば最然るへし、斯の如くなる時ハ激論の輩仮令如何なる事を唱ふるも、真偽ハ忽ち明瞭すへし」と、開鎖論（条約容認可否）について、下問に答えるのではなく孝明天皇に直奏することを発案しており、これは事実上、議奏的な役割で御簾前朝議への参画も視野に入れていることが窺える。

十二月五日に至り、久光が不快のため、名代の小松から慶喜・春嶽・宗城に対し、公卿方の優柔不断さは実に堪え難く、既に決した事も容易に実施されず、よって「武家にて如何ほと勇決するも其詮なく、到底大事ハ行はれかたし故に賢明諸侯を朝廷に召され議奏の内に加へられ然るへし」（二七二～二七三頁）との大胆な提案があった。ところで、朝政参与に並行して問題となったのは、久光の官位問題であり、任官は久光の朝政参与の条件であった。十二月十八日、既に中川宮から春嶽・宗城に久光の官位叙任の相談がなされ、翌十九日に春嶽・宗城は慶喜を訪ね、「島津三郎殿の官位はいかさまに仰出され然るへからん」（二九七～二九八頁）と春嶽が尋ねたところ、「三郎殿に嶋津家を続かしめられてハ如何」と慶喜は回答した。

それにしても、慶喜が藩主に推していることは、久光への驚くべき信頼感を見出すことができ、看過できない。久光は朝廷・幕府・諸侯、すべての勢力から強く依存・期待されており、中央政局における要的存在であることを窺わせる。こうした事実も、『統再夢紀事』によって初めて明らかになった。なお、十二月晦日には武家伝奏野宮定功より、慶喜・容保・春嶽・容堂（二十八日上京）に対し、「不容易御時節ニ付可有参与御沙汰候事」（三一九頁）と、ようやく朝政参与が仰出された。久光に対しては、文久四年（一八六四、元治元年に二月二十日改元）正月十四日に朝政参与の仰出があり、同時に従四位下・左近衛権少将に叙任された。

おわりに

本稿では、越前藩史書を活用した薩摩藩研究の具体的な事例として、八月十八日政変・朝政参与を取り上げたが、『続再夢紀事』によって初めて、多くの事象が明らかにできることを論じた。しかし、こうした越前藩史書を使った実証研究は十分なレベルになく、薩摩藩研究のみならず、幕末史全般を通じて更なる精緻な活用を期待したい。

なお、研究を進める中で、史料には越前藩士の名が散見され、その素性を確認する必要に迫られるが、その際には本書『福井藩士履歴』が有用である。例えば、元治元年九月十一日に西郷吉之助は初めて勝義邦と面談したが、同行したのは越前藩士堤五市郎（正誼）・青山小三郎（貞）であるが、当時彼らは使番であったことが分り、西郷がどのような藩士と行動を共にしていたかを確認できる。越前藩史書と合わせて、本書は活用すべき史料であることを付言したい。

註

(1)町田明広『グローバル幕末史』（第三章「幕府の積極的「開国」戦略」、草思社、二〇一五年）参照。

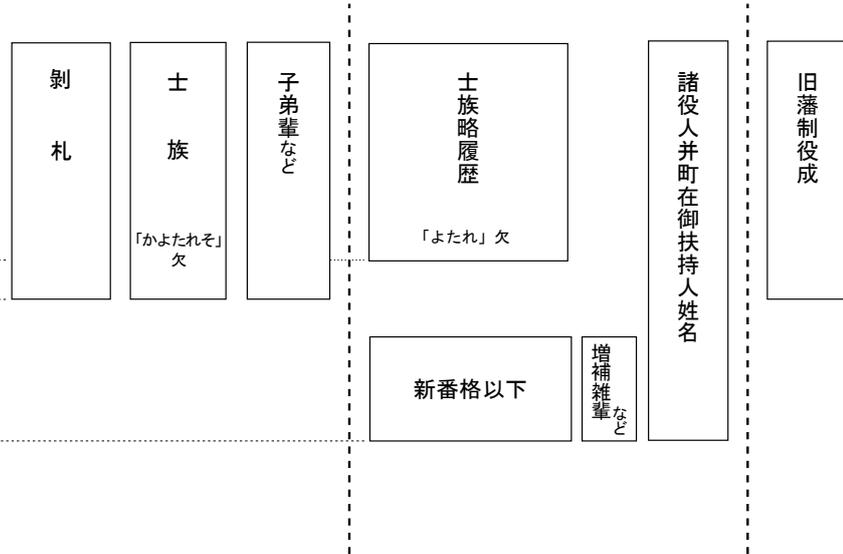
(2)頁は日本史籍協会叢書による。

参考資料

各資料と家格などとの関係

福井藩家臣団の家格別人数
(嘉永5年)

家 格	人 数
本多家	1
高知席	16
高 家	2
寄合席	38
定座番外席	14
番士 (役番外)	106
番士 (大番など)	495
新番・新番格	81
医師・絵師など	49
士分合計	802
与力	39
小役人	84
一統目見席	87
小算・坊主・下代	347
諸組(足軽)	1,341
卒合計	1,898
家臣団総計	2,700

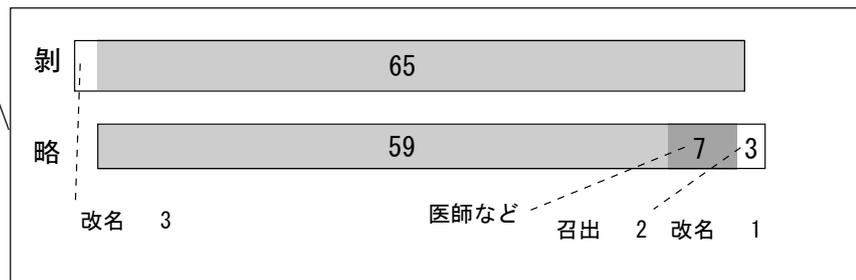


・荒子・中間等の小者973人を除く
 ・舟沢茂樹氏「福井藩家臣団と藩士の昇進」
 『福井県地域史研究』創刊号 1970年による

剥札と士族・士族略履歴との連繫 (い・かを例に)

資料別家数・人数

	剥	士	略	藩
あ	46	47	41	51
い	72	68	62	69
う	13	14	11	14
え	8	7	6	8
お	68	77	65	76
か	68	欠	59	75
き	12	9	7	9
く	21	25	18	24
け	2	2	2	3
こ	22	23	20	28
さ	45	47	40	47
し	19	20	18	19
す	23	27	26	29
せ	10	10	7	10
そ	1	欠	1	1
た	67	欠	欠	71
ち	2	2	1	2
つ	24	25	17	24
て	2	3	3	3
と	14	20	11	17
な	51	59	41	55
に	17	16	15	17
ね	1	2	1	2
の	12	11	11	11
は	43	49	37	52
ひ	25	25	20	23
ふ	10	11	9	10
ほ	24	26	22	28
ま	37	48	32	43
み	29	37	23	31
む	9	11	7	11
め	1	1	1	1
も	8	8	5	7
や	46	55	41	53
ゆ	2	2	2	1
よ	22	欠	欠	28
わ	10	15	8	11



- ・「剥札」「士族」は一連の資料で、幕末維新期の福井藩家臣団(士分以上)の人事記録としてはもっとも充実している。
- ・「士族」の第3冊(かよたれそ)が欠本、「(士族略履歴)」「旧藩制役成」で補完が必要。
- ・「剥札」と「士族」「(士族略履歴)」は、ほぼ連繫する。「剥札」では改名や卒への降格、「士族」「(士族略履歴)」では子弟の新規召出(戊辰戦争など)、武生家臣などの新規繰入(明治3年2月)などが不連繫の原因。

福井藩士履歴 6 みゝわ

福井県文書館資料叢書14

平成三十年二月二十八日 発行

編集発行 福井県文書館

九一八―八二一三

福井県福井市下馬町五二―一

電話〇七七六―三三―八八九〇

印刷 創文堂印刷株式会社

九一八―八二一三

福井県福井市問屋町一―七

電話〇七七六―二二―三三三(代)

